【論　文】

R・マルタン・デュ・ガール『一般書簡集Ⅱ』より

――一つの照査のための分析研究（二）――

店村新次

まえがき

マルタン・デュ・ガール『一般書簡集Ⅱ』の文通相手は Robert Allard（二通）、Jean-Richard Bloch（七通）、Henriette Charasson（八通）、Yvonne de Coppet（六通）、André Fernet（一一通）、Jean Fernet（一二通）、Roger Fleury（一通）、Gaston Gallimard（一一通）、Marcel Hébert（一一通）、Albert Houtin（五通）、Félix le Dantec（一通）、Madame Félix le Dantec（三通）、Berthe Lemarié（六通）、Maurice Martin du Gard（七通）、Pierre Rain（八通）、Maurice Ray（五〇通）、Romain Rolland（二通）、André Suarès（三通）、Pasteur Vallery-Radot（三通）、Ferdinand Verdier（五通）、Madame X…（一通）である。

この『一般書簡集Ⅱ』は一九一四年から一九一八年までの時期、つまり主として第一次大戦の初めから終わりまで

の五年有余の期間を覆う。騎兵集団への資材補給輸送班に配属されたマルタン・デュ・ガールはこの間、戦塵の下をトラックで駆け巡る日々を送っていた。したがって、作品としてこの時期に完成し得たものは僅かなものでしかない。しかし、危険を冒して基地から戦線へと輸送の指揮をとりながらも、彼の頭脳は戦争のおぞましい現実をよそに、絶えず文学することを止めてはいなかった。というより、そうすることで彼は、人間に対する厭悪と絶望から救われていなければならなかったのである。この態度が、他のおおかたの戦士たちと大きく異っていた。ところがそれと同時に、否が応でも戦場の光景は彼の網膜を刺激せずにはいなかった。それは当然彼の思想に作用して、人間観や政治思想や芸術観に生なましい影響を及ぼさずにはいなかった。この両面性が『一般書簡集Ⅱ』に、こもごも印されている筈である。そして、このようにして捏ね上がった精神のアマルガムが、戦後すぐに手がけられる『チボー家の人びと』という作品の未来を決定する土壌となったことは、確実と見てよいのである。小説家自身が悪夢の季節として抹殺したかったこの戦中の期間こそが、おそらくは彼の生涯でも最も熾烈さに充ちた、激動と転起の時間だったのである。

一、開戦前夜

「生きながらの死」のテーマ——ジャンヌ・ダルク論争

マルタン・デュ・ガールはN・R・F・誌の一九一四年五月一日号に、恩師マルセル・エベールの著『ジャンヌ・ダルクは誓絶したか？ Jeanne d'Arc a-t-elle abjuré ?』(Nourry, 1914) を断固として肯定する書評を発表した。生

涯を通じて雑誌への執筆を極力忌憚して、論説めいたものの発表を極度に嫌ったマルタン・デュ・ガールの数少い寄稿文の一つである。

ジャンヌ・ダルクが一四三一年五月二四日、St. Quen 墓地の死刑台のところまで連行されて、異端拋棄の宣誓を迫られたとき、彼女は火刑に処せられることへの恐怖から、宣誓書に十文字をもって署名した。そしてその四日後に彼女は、それが「命を救うためだった」と痛悔もて告白した。以上が史実として伝えられるところなのであるが、二〇世紀に入って、教会側の歴史家たちがこの事実に新しい解釈を加えて理想化し、歴史の神話化を計ろうとする動きが興こった。そして、ジャンヌの誓絶は、むしろ慎重さと、精神力と、信仰心の賜とも言うべき、称讃に値する行為だった、とまで主張するにいたった。このような趨勢に対してエベールは、資料を挙げて史実の尊重を勧説すると同時に、過去一五年間あまりの教会側の運動の経過について解説していたのである。

勿論マルタン・デュ・ガールの書評は、師であり友であるエベールの所説を支持し、その価値を世に知らしめるために書かれたものであるが、この書評が大きな反響を起こし、なかんずく、他ならぬN・R・F・の同人でもあったポール・クローデルを激怒させることになった。『書簡集Ⅱ』のエベール宛の書簡のなかに、そのことがかなり詳しく述べられている。

ジャンヌ・ダルクについての私の書評に関して、「新フランス評論（ヌーヴェル・ルヴュー・フランセーズ）」社で起きている事柄についても、お話する心要があります。でもこれは、是非とも内密に願います。というのは、決して口外しないと約束してあるからです。雑誌編集責任者であり、クローデルと信仰上の文通を交わしているジャック・リヴィエールに、クローデルは時を移さず次のように書き送ってきたらしいのです。「もう一度デュ・ガール氏の文のような記事を載せたりしたら、私は決定的に貴下の雑誌から去ることにします」と。その手紙は私信でした。しかしリヴィエールは、内々でこの手紙を委員会にかけたのです。委員会は見る間に二つの陣営に分かれ、議

論沸騰ということになりました。クローデルが去れば、雑誌はクローデル・ファンというきわめて重要な読者層をも失うことになる、という説があるいっぽうで、みなが批評の自由に大いに固執するという工合だったのです……（一九一四・六・二）

それから三日後のやはりエベール宛の手紙のなかで、マルタン・デュ・ガールは次のような愉快な言辞を弄している。

「新フランス評論」五月号に掲載されたクローデルの劇『プローテウス』をお読みになりましたか？　私はリヴィエールに次のように書いてやりたいほどでした。「もう一度クローデルの劇のような戯曲を載せたりしたら、私はあなたのもとから去ることにします」と。……（一九一四・六・五）

知ってか知らずか、クローデルは後年重ねてもう一度、この典型的な条件構文を使用することになる。それは一九三一年、コポーの演出でマルタン・デュ・ガールの『寡黙の人 Un Taciturne』がルイ・ジューヴェ劇団によって初演されたときのことで、近親相姦と同性愛がこんがらかったその演劇を不謹慎と見たクローデルは、『もう一度マルタン・デュ・ガールの劇が上演されたりしたら、私はあなたの劇団から私の演劇を引き上げます』とジューヴェに通告するのである。

こうしてクローデルとマルタン・デュ・ガールは、犬猿の間柄でもって終始するのであるが、そのマルタン・デュ・ガールの妻エレーヌがクローデルの心酔者だったという皮肉は、この夫婦のありかたの一面を象徴する。

生涯雑誌への寄稿を嫌ったマルタン・デュ・ガールが、エベールの書についての書評を進んで書く気になった動機については、近代主義のゆえに教会から破門され、フェヌロン校校長の職を追われた敬愛する師友のためには持論を

曲げる労も厭わぬという、彼の心意気を挙げるだけで充分であるかも知れない。だがそのほかにも、ジャンヌ・ダルク問題そのもののなかに、彼の共鳴を強く引き出す要素が潜んでいたことを見逃すことはできないと思う。すなわち、ジャンヌが火あぶりの刑という恐ろしい肉体的責苦への恐怖から節を曲げるにいたった、という史実に基く理解は、彼の正直な感覚的論理が直接共鳴し得る、この上ない真実と感じとられ、これに些かでも粉飾を施すことは、彼にとって許しがたいまやかしと思われたことであったろう、と推測されるからである。生から死への移行という恐ろしい瞬間に寄せる不安、つまり臨終苦というものに対する未知の肉体的恐怖（バロワの父が言う le térrible X）こそは、彼が生涯をかけてその作品のなかで追究して止まなかったテーマなのであり、それはまた、その前年に発表したばかりの『ジャン・バロワ』における、最大究極の関心事でもあったのである。死期を迎えて回心に走ったバロワは、炎に身を焼かれての「生きながらの死」を前にしての恐怖から、異端棄絶の強制に屈するジャンヌを、みごとに先取りしていたのであった。私はマルタン・デュ・ガールにおけるこの「生きながらの死」の恐怖、そして虐殺のイマージュについて考察したことがある（「同志社外国文学研究」第一四号『ノワズモン＝レ＝ヴィエルジュ試論』参照）。若年期から死の恐怖に苛まれつづけたマルタン・デュ・ガールが、火あぶりの刑に怯えたジャンヌ・ダルクの心境に強い共感を覚えたろうことは、察するに難くないところである。しかも彼のうちには、史実を忽せにすることを許さぬ、古文書学院出身者が捷みついていた。このようにして、寄稿嫌いの小説家が敢えて戦闘的な書評を公けにするための諸条件が、完全に整えられていたことになるのである。

人生途上の遺言書

ジャン・バロワはいまだ体力気力ともに衰えを知らぬ人生途上において、危く交通事故を逃がれる瞬間自分の口か

ら思わず洩れた神頼みの一句に震撼するや、直ちにみずからの科学的合理主義、宇宙的決定論への信念を一通の遺言書に定着させて、それを後日のため筐中に保管する。

『ジャン・バロワ』を読んで感動したマルセル・エベールは、みずからもリュスの死を模範にしたいと考えると同時に、「私はつねに無意識というものの悪しき力――そして取り巻き連というものが及ぼす悪しき力を恐れるのです」（一九一三・九・二〇）と作者に書き送るだけでは満足せずに、みずからもバロワに倣って、二ページほどから成る、現時の信念を定着した一通の遺言書を認ためた。これは「Coenobium」誌の一九一四年三月号に「精神的遺言書 Testament Spirituel」として発表された。エベールは「（信仰の見地から）私の内的生活をよく要約できたと考えるこの一文を書くよう私に決心を促したのは、まさにジャン・バロワの運命だったのです」という言葉とともに（一九一四・五・二八）、この文をマルタン・デュ・ガールに送ってきた。

それを受けとった『ジャン・バロワ』の作者は旧師に、次のように書き送っている。

精神的御遺言書、大いなる感動もて拝読しました……この二ページは、現下はもちろん永久に、カトリシズムの歴史の一部をなし、宗教思想のいかなる史的研究にも永遠に欠かすことのできぬ、錆びることない純金の鎖の輪となる、と申しても、私の思い違いではないと考えます。……（一九一四・六・二）

やがてエベールが死を迎えたとき、マルタン・デュ・ガールはその死がまさにリュスの死であったことを認めるのであるが（モーリス・レイ宛、一九一六・三・六）、エベールの遺言書といい、その死といい、小説と現実との流通がこれほど密接に行なわれた例は、そう多くあるものではない。それに、問題はそれのみに止どまらない。途上の遺言書

は、『ジャン・バロワ』の作者自身の身の上にも、不思議な繰り返しを持つことになるのである。マルタン・デュ・ガール自身は決して迷信に惑わされるようなことはなかったが、彼の一生には、かなり多くの予示的出来事と、その未来における現実の反復現象が見られるのである。たとえば、バロワの交通事故と、マルタン・デュ・ガール自身の自動車事故、というように……

マルタン・デュ・ガールは『モーモール大佐の日記』に行きづまって苦しんでいた一九五一年、クロード・エドモンド・マニーの偏向的な『チボー家』の批評によって深く傷つき、自分の死後まで発表させぬものとして『遺言的思索 Pensée testamentaire』を書いて、これを友のピエール・エルバールに預けていた。それが「ラ・キャンゼーヌ・リテレール」紙の一九七〇年七月一六日―三一日号に、資料として掲載されているのである。いまはその内容について述べるときではないので省略するが、三つの人生途上の精神的遺言書のなかに奇しき因縁を読みとることは、この作家の場合いろいろな瞑想にわれわれを誘うだけの力がある。

二、戦場を駆ける小説家

小説家は弟のマルセル・マルタン・デュ・ガールとともに、動員令発令から時を移さず一九一四年八月二日、下士官として応召し、第一騎士集団への糧食補給輸送自動車班の、しかも兄弟そろって同じ小隊に配属された。彼はモーリス・レイに次のように説明している。

僕たちの小隊長の中尉は、気儘を楽しむ人で、それに健康も優れなかったため、彼が采配すべき二〇台の貨物自動車と六〇人の兵員とを、マルセルと私に任せてしまった。……僕たちふたりだけで、六〇〇〇人の兵と同数の馬への日々の補給の責任を負って

いる。もしわれわれが時間までに荷積みをしなかったら、もしわれわれが道を間違えたりしたら、もし補給すべき部隊が見つからぬようなことが起こったら、六〇〇〇人の兵と六〇〇〇頭の馬が一日断食ということになる。これは重い責任だよ……（一九一四・一〇・九）

エレーヌは家族とともにヴィシーにあって、病院の看護婦として銃後の勤めに励んでいた。やがて彼女は負傷兵の世話をする包帯班にまわされて甲斐がいしく立ち廻ることになるが、未来の『チボー家』のフォンタナン夫人の戦時救護所の開設とその献身は、エレーヌのこの体験が下敷きにされていると考えて、ほぼ間違いないところと思われる。詳細はここに挙げないが、『書簡集Ⅱ』には、エレーヌの朝の七時から夜一〇時過ぎまでにいたる、生まれ変わったような健な気な奉仕ぶりが、戦地にある夫から友人たちに報告されているのが随所に見られる。

ひ弱な体でそのような重労働に服するエレーヌの身を案ずる夫は、年の暮れ、銃後にある友モーリス・レイに、花束を新年を迎える妻のもとに届けて欲しいと手紙を書いている。

エレーヌとクリスチアーヌは正月を過ごすよう、パリのアンペール街に帰る筈です。ル・テルトルで寂しく暮している実家の父母がパリで会いたがって呼んでいるのです。一二月三一日にアンペール街の門番に、花束を二つ、同封の言葉を添えて届けさせてもらえないだろうか。そして門番に一月一日の朝エレーヌにそれを渡すように言わせてほしい。僕は君にこんな子供じみた配慮の巻き添えを食わすほど、いい格好が好きではないのだが、君はエレーヌを知ってくれているから、それが彼女の新年の一日を変えてしまうのに充分なことは解ってくれると思うのだよ……（一九一四・一二・二二）

モーリス・レイは一九一五年一月七―一〇日付の戦地からの友の手紙で、エレーヌが贈られたすみれの花束に感動したという、感謝の言葉を聞く。

マルタン・デュ・ガールという人の優しい心根は、戦場において最もよくその発露を見る。と言うより、平時、創作のための孤栖のなかに埋ずもれるこの小説家の、世間と隔絶したその骨格が阻んでいた人間的心情が、戦地という現実世界の、軍隊という群衆のなかで、一戦士という開放の場を得て一度に噴き出す感があったのである。たとえば一九一五年一月一五日付エダン発のイヴォンヌ・ド・コペ宛の手紙のなかで、彼は戦地で拾った一三歳のみなしごの悪童の厚生のために、引きとってくれる施設を探して欲しいと、友人マルセル・ド・コペの娘イヴォンヌに書き送っている。そのイヴォンヌの潑溂とした若さの開花を、おぞましい戦場にあって彼は、この上なく貴重で好もしいものとして祝福していたのであった。また一九一八年一月三一日のレイ宛の手紙を見ると、恐らくはマルタン・デュ・ガールの小隊にいた部下の貧しい兵士に関してのことと思われるが、その家族にこっそり匿名で金を届けて欲しいと書いて、五〇フランを戦地から送金している。その兵士が賜暇で家に帰ると、途端に、一人分の食扶持が増えただけで(à cause de cette bouche en plus)苦しくなるという家庭だったのである。

小隊長の代わりを勤めていたマルタン・デュ・ガールは、そのような人間性によって、部下の兵たちから慕われ、信頼されていたようである。

> 自分がなすべきことを真面目にやり、当初から六〇人の部下の一人ひとりを理解しようと努めたことに対する、大きな信頼と、全員一致の一種の愛情に包まれているのを感ずる。自然にそしてきわめてゆっくりと形成された、僕を取り囲むこの尊重(四か月も肱つき合わせて暮らすと、腹の底まで識り合うようになるのだが)、これが驚くほど僕の支えになっている。これは素晴らしい支柱だよ……(モーリス・レイ宛・一九一四・一二・八)

戦争とそれがもたらすモラルの荒廃

絶対的平和主義者マルタン・デュ・ガールの戦争観については、私はすでに他の場所で一度ならず触れ、それを要約すれば、戦争の現実に対する認識においては『砲火』のアンリ・バルビュスに近く、思想的にはロマン・ロランのそれに最も近い、と述べてきた。そしてマルタン・デュ・ガールの場合には、戦争は彼の文学生活を阻害する厄介なものとしての理解が先立った。このような点について、『書簡集Ⅱ』に見られる多くの言及から再度検証を行なうことは、重複の憾みなしとしない。であるからここでは、戦地で目撃したモラルの荒廃から、彼が戦後にどのような世界を予見していたかということを証するもののみを、照査の対象としてみたいと思う。なぜならば、彼が戦後社会のモラルについて予想したものこそが、当時制作中の『二日間の休暇』、そして次に企画される作品、とりわけ『チボー家の人びと』に対処するときの彼の心的態度を決定する力があったのだからである。したがってこの照査は、『書簡集Ⅱ』全体を通じて、四年間にわたる彼のこの点についての思索の変遷を逐うよう私を強制する。

開戦後僅か数か月で、マルタン・デュ・ガールは喧伝されるような聖戦思想とはうらはらな戦争の野蛮性を見抜いて、人間獣性のおぞましさに恐怖を覚える。

私が殆んど毎日のように見ているものをもし人が見たら、きっと人類からは何ひとつ期待できなくなります。あらゆる人間の野蛮性。最良の人たちさえもが激しい抵抗もなしに、いま幅をきかせている唯一の法則たる、強者生存の法則を受け容れているのです。私は殆んど新聞を読んではいません。しかし、こんな時期になおも喋り続けている職業的弁舌家たちが、まったく虚偽の弁を弄しているという感じがしています。いまは沈黙し、沈思すべき時なのです。私たちのように毎日フランスの兵士たちと接触していると、野蛮性に対する文明の戦いだなどと、いたるところでがなりたてるのを聞いてはいられなくなります。こちらもあちらも、

同じ下劣さ、同じ残忍さなのですから。二つの野蛮性がぶつかり合っているのです。そこから、いったい何が出てくるというのでしょう？（マルセル・エベール宛、一九一四・一一・三）

聖戦思想を煽りたてる新聞「エコー・ド・パリ」は彼に嘔吐を催させ、バレス、バザン、ブールジェなどの挑唆は彼を反抗に駆り立てる（モーリス・レイ宛、一九一四・一二・二七）。「フランスの活気と陽気さが塹壕のなかに引っ越したなどと喝破したがる、新聞の進軍ラッパに耳を藉してはなりません」と、彼は年若いイヴォンヌ・ド・コペ嬢に書き送る（一九一五・一・一五）。「いまは沈黙し、待つべき時です。身を小さく縮めて、黙って涙すべき時なのです……血が流れます。毎日流れます、敵味方相方から流れるのです……」（マルセル・エベール宛、一九一五・二・七）。

しかしまだ一九一五年頃には、このような大動乱がいっぽうでは、戦後の未来において、過去の因循と縁を断ち切るための何か新しい息吹きを醸しだす可能性があるかも知れぬという、かすかな希望を抱かせる時もあった。

しかしそれでも、僕はこの動乱のあとにわれわれが見出すだろう未来のフランスに思いをいたし、潜り抜けた危機がもたらす結果として、僕がかねてから願っている改良のいくつかのものを、心寛くフランスに期待せずにはいられない。それはたとえば真面目なもの、深い瞑想への嗜好、誠実、精神的清潔さ、良心の純粋性といった、流行遅れとされていた幾つかの美徳への少しは進んだ嗜好、のことです。こんなに近くまたこんなに長く、ぶっつづけで死と隣り合わせて生きた人びとが、戦争から帰ったとき、小説にしろ演劇にしろ、かつて彼らを喜ばせていたようなものに満足を覚えると、君は考えられるだろうか？　僕はそんなことはないと期待しているよ……（モーリス・レイ宛、一九一五・三・九）

戦前のフランスの道徳的あるいは芸術的堕落に対して抱いていた彼の不満、死と直面した極限状況での体験がそれへのショック療法として働くかも知れぬという、大災厄のせめてもの余得への期待、がこの時期にはあったことが解

る。しかし、彼自身「無事にそこから出られたのが奇蹟（レイ宛、一九一五・四・二四）」という体験を持ったヴェルダンの死闘ののちは、そのような楽観主義も影を潜めてしまう。

私はますますこの戦争にはなじめなくなっています。この戦争は、嫌悪すべき情熱と非人間的な昂奮しか呼び醒ましはしないのです。それは、私が信じ期待してきたすべてのものの否定です。それは、人類のあり得べき進歩への希望を、ことごとく破壊します……もはや、よきもの、よりよきものを信ずることはできません。勝つことと強者生存というものの君臨が唯一の実証的真実であり、人間を支配する唯一の法則なのだという、明白な事実に屈服し、それを告白せざるを得ません。より多くを望み、他の事柄を夢みること、それはまやかしです。そのような夢を楽しんだり、意識してそれに縋っていることはできるでしょう。しかし、それは騙されていることです。現実に自然のなかには闘争以外の何ものもないのであり、あまねき食み合いしかないのだということを、知る必要があるのです。……（イヴォンヌ・ド・コペ宛、一九一五・四・二二）

このような絶望的認識のなかで折もおり、モーリス・レイが戦地の友へと送ってくれたアンリ・マシスの『フランスに敵対するロマン・ロラン Romain Rolland contre la France』（一九一四・九）が、一挙に暗雲のなかに呻吟していたわれらが小説家を感激で包むことになった。マシスはロランを非難するこの書のなかに、やがて『擾乱を超えて Au-dessus de la mêlée』（一九一五・一一）のなかに収録されることになるロランのマニフェスト（「ジュルナル・ド・ジュネーヴ」紙に掲載）を引用していたのである。マルタン・デュ・ガールを狂喜させたのは、勿論マシスが攻撃の材料として引用していた、このロラン自身のマニフェストのほうである。彼は早速スイスのロランに宛てて、感謝の手紙を書いている。

拝啓、最近ある友人が、マシスの書『フランスに敵対するロマン・ロラン』を送ってくれました。

この事件については、私は何ひとつ、と言うか殆んど何も知ってはいなかったのです。私は十二か月このかた、貨物自動車に乗って動きまわっており、それは危険な任務ではないにしても、私をおよそノーマルな生活の埒外に置いてきたのです。あなたがつらい目に合わされておられたことについての、なにがしかの新聞の反響に接したことは憶えております。それも大分前のことでした。要するに、私は何も知りませんでした。一九一四年九月のあなたの御論文は、一行たりとも読んだことがありませんでした。

そこへこの本が今朝到着したのです。私はマシスの文を走り読みし、あなたの文に飛びつきました。ああ、ついに、ついに、なんという吸うも爽やかな一陣の薫風！　私はその風で蘇生し、若返り、いま初めて未来を生きるための欲が湧いてきました！

私はいま批判したり、議論したりする状態にはありません。また、したくもありません。ただ次のように言えるだけです。初めての穢れない一陣の清風、そして、限られた友人たちからの幾通かの手紙を除くと、一年このかた唯一と言ってよい薫風が、またしてもあなたのところから吹いて来たことになるのだと。私はあなたに御礼を申し上げ、いま一度心からなる尊敬と共感を捧げる必要を感じたのでした。

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

あなたがどんなにかお苦しみになったに違いないと想像し、案じ申し上げています。でも恐らくいまは、おぞましい雑音から逃れて、お仕事のなかに静穏を見出していらっしゃることでしょうね？　それとも、現下の失望を克服しかねていらっしゃるでしょうか？

他の多くの人びとのといっこうに変わりばえのせぬ、しかもあなたになんの印象も呼び起こさせぬ名前を付して――ことに、こんなに遅ればせに差し上げる一文は、あなたになんの係わりもないものであるかも存じません。お許し下さい。しかし私としましては、直ちに、前後も省みることなくこのような一文を差し上げることで、ある深甚な喜び、かつての日の喜びを、噛みしめているのでございます。

RMG

（一九一五・八・二五）

「吸うも爽かな一陣の薫風 une bouffée d'air respirable」その他の表現は、アンドレ・フェルネ、モーリス・レイ、マルセル・エベールなどに対しても、殆んどそのまま反復されている。そしてフェルネに向かっては、ロランのお蔭で、自分の過去つまり自分自身と、論理的に合致し得る自信ができたと述べ（一九一五・八・二八）、レイには、もしロランの文に法王の署名がなされていたのだったら……と、キリスト教のために惜しみ（八・二九）、これら全部の人びとに、ロランのマニフェストはいつの日にか古典として仰がれることになるだろう、と予言している。またフェルネとレイへの手紙のなかには、「私は平和時のための戦士 Je suis un combatif pour temps de paix」という言葉が見られる。この文章の意味は、エベールへの手紙（八・三一）によって、自分が戦士であらねばならないのは戦場においてではなくて、不当に傷つけられたロランの名誉を回復するため、復員後に為されなければならぬ闘いにおいてである、という意味に解すべきことが明らかとなる。そしてマルタン・デュ・ガールはその三か月後に、はやくも戦地からその闘いに実質的な参加を始めている。

フランス本国でR・ロランを擁護する人びとの列に、僕も加わるよう要請を受けました。勿論僕はそうしました。僕の手紙を、ロランを弁護する何かの書に掲載してくれるのだろうか？　それは全然解らない。それに、僕はそのことに固執していません。今の僕には、「それを聞く」ための権利がないのだから。こちらで流行っている言葉で言うと、われわれは「それを閉じこめて」、やがて立ち上がる日が来るのを待っておればいいのだから。……（モーリス・レイ宛、一九一五・一一・一四）。

この手紙というのは発見されていない。

しかし、戦争は続いていた。マルタン・デュ・ガールの戦争に対する実感的認識のうちで、当時の彼自身の意識に

とっても、またその後の彼の文学生活への影響という回顧的な意味からも、最も重要なものは、すでに触れたように、ヨーロッパ文明がみずからを否定することになったこの大災厄の衝撃によって、それをくぐり抜けたあとのヨーロッパの精神生活が、どのような変化を蒙り、どのような方向に向かわせられるのか、という疑問であり、不安であった。

旧来の価値観のすべてが覆されてしまった。もはや考えることも推理することもできなくなっている。その理由の一つは、この問題の諸要素が目まいを起こすような速さで変化し、以前にはまったく想像もつかなかったような様相のもとに現われてくる、ということなのだ。かつて重要だったものは、もはや物の数ではなく、かつて物の規準、物の比較に役立っていたすべてのものが、もはや現在とはなんの関連もなくなっている。……（モーリス・レイ宛、一九一五・一〇・一六）

老いたるヨーロッパ（la vieille Europe（アンドレ・フェルネ宛、一〇・四）」の資本主義は、そのはち切れる爛熟そのもののゆえに、人民を死地に追いやる災厄という大手術を受けて、醜悪な膿を排泄しなければならなかった。マルタン・デュ・ガールには、時代遅れのヨーロッパ資本主義に下された断罪が、この大戦であると思えた。この試練のなかから生まれ出てくるものは、そのような旧世界を否定する思想であり、運動であるとしか思えなくなってきた。

僕の考えによると、思いのほか早くなるかずっと先になるかは解らないが、これらすべてが終わるのは、社会主義の盛り上がりによってであり、われわれの法律の全面的で深甚な手直しによる、ということです。ことほどそれほど、資本主義が断罪されていることを、すべてに垣間見ることができるのだから。……（ピエール・ラン宛、一九一六・一二・一七）

マルタン・デュ・ガールは生涯、もし資本主義か社会主義かと問われれば、つまりこれらのうちの二者択一を迫ら

れるならば、自分は勿論社会主義に組すると答えるだろう、と言う。しかし、彼がコミュニズムによって確実に人類が幸福になると考えたことは、一度もなかったのだと言ってよい。とくに、ソ連型の社会主義制度には大きな疑問を持ちつづけていた（非常に早くからユーロコミュニズムを夢想していた形跡がある）。そして、世界の未来像についての彼の思想は正確に何であったのか、と問われれば、結論的にはいわく不可知論であり、懐疑主義であったというのが正しい。『チボー家の人びと』最終巻『エピローグ』における、主人公アントワーヌの懐疑はまさにその移置である。しかし、第一次大戦中、まだロシアに革命が遂行されてもいないうちに、彼はフランスに社会主義革命の可能性を予感していた。

僕は民衆の恥知らずで野卑な良識に期待する。それはおそらく、パンと葡萄酒と媾合の名において、こうしたすべての新シュルピス会的アクセサリーを一掃してくれるだろう……。

あらゆる戦線で同時に考えられていることを表現するなら、それはsovietという語になる。こう考えたがらない人がいるなら、戦士たちと交替するためにここへ来てみるがいい。君は僕が次のように確言できるなどと考えることもできないだろう――すべての戦士のうちに、睡み、目覚め、あるいはすでに活動を始めている、獰猛な革命家がいるのだということを。彼らの階級、教育、経歴に殆んど関係なくだよ。（モーリス・レイ宛、一九一七・六・一四）

「新シュルピス会的アクセサリー」とは、悲惨な戦場をよそに、宇宙の正義だの、人間の尊厳だの、権利だの、文明だのという空虚な大言壮語〔des grands mots vides〕で現代神秘主義的理念を弄ぶ評論家たちの業のことで、マルタン・デュ・ガールはもはやそれらに一切信を置けぬ心境になっており、クレマンソー、バレス、ロイド・ジョージ、ウィルソン、バタイユなどとともに、この点ではロマン・ロランの神秘主義的な一面をさえ拒否するようになっていたのである。

右の引用文に見るものは、先に引用したモーリス・レイ宛一九一五年三月九日付の手紙に見られた、あの戦後への漠たる期待、すなわち「真面目なもの、深い瞑想への嗜好、誠実、精神的清潔さ、良心の純粋性……といった美徳」という、戦争によるショック療法で蘇る旧き良きものへの予測と、実質的になんと大きく変化していることであろう。以前のは彼が「かねてから願っている改良（amélioration）」であったが、今回は「われわれの法律の全面的な手直しによる」革命である。一九一五年のショック療法による「改良」は、むしろ旧き良き時代の忘れ去られたものへの復帰であったが、一九一七年の「革命」は転覆による過去との断絶、未知への突入である。

僕は、いずれそのうちに政府にとって代わる soviet を持つことに、期待している、ままよ、なんとでもなるがいい！　僕個人としては、ペンを――僕に残っているなにがしかのペンを――失うだけに過ぎない。だが僕はそれを、全体的大変動のために喜んで犠牲にしよう。シェイクスピアのマーク・アントニイのように、僕も「無秩序よ、いまやお前は解き放たれた！　さればお前が好む流れをとれ！」と言おう。僕は現在についてみじめな見透ししか持てないので、これより悪くなることを恐れる気にもなれない。（モーリス・レイ宛、一九一七・八・一）

「現在についてのみじめな見透し」は、前線を覆う恐ろしい精神的荒廃の目撃からきたものであった。

僕の周囲には、前方にも後方にも、いたるところ、言語に絶する全体的な倦怠が、あらゆる分野に、下位のものから上官にいたるまで、すべての軍服の下に、日毎に暴露されてゆく。発条はこわれてしまった、こんどこそ完全にこわれてしまったのだ……（同前）

そのようなあまねき厭戦気分のなかから、社会転覆の気運が盛り上がり、むしろそれが戦争を終わらせる可能性も

ありと、マルタン・デュ・ガールは見る。それでは彼自身は、そうした変化にどう対処してゆくのか。

僕は復員後の僕のまったく違った生活について、想像を巡らせている。すべての過去がスポンジに吸いとられたように消え去るなどと、言っている訳ではない。そんなことを言ったら、完全に間違いになるだろうし、反対の錯覚に陥るのと同様に、危険でもあるだろう。そうではなくて、新しい諸要素が数においても優勢となり、また重要性を持つようになるため、あらゆる生活設計の試みのなか、思想調整のあらゆる努力のなかに、それらが強制的に混入してくるだろう、と言っているのです。だから僕は、未来の生活に必須の条件となるそのような運命的変転に、もういまから身を委ねている。そして、個人および集団の哲学に及ぼす戦争の著しい表明のすべてを今から受け容れ、目と耳と――そして心を――出来るかぎり大きく開き、出来る限り快く迎え入れる受容の態度を持して、その進展に対処する心の準備をしている。むしろ「準備をさされている」と言うほうがいいのかも知れないので、不正確な言いかたを用いている訳だが、もしそのように言えるなら、ということです……

ひとたび平和が到来したとき、いくばくかの期間の内省と模索ののち、それまで僕のうちに残っている創造的活力が推力を再び獲得して、事物と思想とのあいだの関係を変えている筈のそうした新しい与件すべての真只中で、再び活動を始め、現在のところ僕にはあまりはっきりとヴィジョンの持てない作品を想像し、また創り出すよう、僕を導いてくれることだろう……（ピエール・ラン宛、一九一七・八・一〇）

ここに暗示されているのは、あり得べき全体的な社会革命と言うのではなくて、社会主義的変革ぐらいのところかも知れない。しかしいずれにせよ、資本主義的でカトリック的でブルジョワ的なフランス社会のありかたには必ず大きな衝撃と変化がもたらされる、ということへの覚悟は出来ていたようである。彼はそれを願ったというより、それを覚悟したのである。これを過剰予想であったと言うことは出来ない。戦後いくばくもなくしてフランス全土を席捲する人民戦線運動への正しい予感、と解釈していっこうに差しつかえないからである。

ただしマルタン・デュ・ガールの予測は、それより些か切迫した、目前のものとして感じ取っていた。そして、そ

の変化を受け容れるために、それをしかと自分の目で確かめねばならぬという、意欲を燃やし始めていたのである。このことが、ヴィユー・コロンビエ座の渡米への随行を断固として拒否する、彼の現場固持の態度となって現れている。あのように戦争を厭悪していた彼が、なぜ戦地から彼を救い出してくれる筈のこのアメリカ行きの勧誘に背を向けたのか、という理由が、ここで明瞭になるのである。

考えるところ、賢明さをもって戦争終結を待たなければならないのは、以上のような訳だからです。このような精神のうちに、僕は（安全な場所を探し、そこに身をちぢめて）戦地に留まり、フランスを離れないよう望んだのです。そうでなかったら、僕はいまごろ、二か月も前から、自由の身となっていただろう。アメリカでのフランス文化宣伝という使命に擁護されて、一年間の召集猶予を受け、ニューヨークでのヴィユー・コロンビエ座公演の共同支配人となって、僕の妻子の渡航費も滞在費も全部支給した上大変な額の月給まで支給するという提案を受けていたのです。君も解ってくれるだろうが、これは魅力がある。しかし君もおそらくそう考えてくれるだろうように、僕はためらったりしなかったことを告白するよ。僕は自分がすっかり変わろうとしていること、すっかり鋳直されつつあること、そして、僕が自分にとって重要だと思うこの内心の作業のすべてが、ほかならぬ戦争から来たものであり、戦争が惹き起こした断絶から来たものであり、戦争が僕を生きるようにさせたこの環境から来たものであることを感ずるのだ。僕はこうした思いもかけぬ復活の要因を捨て去ることは望まない……（同前）

このように、当時のマルタン・デュ・ガールにとっては、現在も未来もともに、予断を許さぬ未知の不気味さに包まれていた。このような判断が、制作途上にあった戯曲『二日間の休暇』や、すでに意欲を掻きたてられていた小説計画『善と悪 Le Bien et le Mal』（『チボー家の人びと』となるもの）をそれ以上進捗させることなく、終戦まで保留の形で放置したゆえんなのである。そのような考えかたが、年下のいとこのモーリス・マルタン・デュ・ガールが本を出版したいという考えについて相談してきたときに、それを差し控えるよう忠告した、マルタン・デュ・ガー

ルの返事のなかに端的に述べられている。

目下のところは、何ひとつ言うことがない筈なのです。もしあなたが昨日のことについて語ろうとすれば、戦争による転覆の激しさのために、それはなんの興味も起こさせ得ぬという危険性があります。もしあなたが今日のことについて語ろうとすれば、あなたは、理解に必要な距離をとり得ないため、何ひとつ語ることはできないでしょう。あなたは資料的な覚え書ぐらいしか発表することはできません。そんなものは、あなたの行李のなかに入れておけばいいのです。もしあなたが明日のことについて語ろうとすれば、それは尚更悪いことになります。僕の考えでは、思想ならびに行動のあらゆる分野で今まさに実現されつつある齟齬を、誰ひとりとしてまだ押し測ることはできないのです。そんな未来の幾つもの要素を今からはやくも識別しようと努めることは、まるでクリストファー・コロンブスの船員のひとりが、そこに着きもせぬうちから新大陸の模様について述べたてるのと同じくらい、無益なことなのです、（一九一七・八・二七）

このような精神状態のなかで、旧態然たる主題をもつ『二日間の休暇』は放置され、それにかわって、世相の変化に臨機応変的に対応する可能性ありと考えた「演台喜劇（コメディ・ド・トレトー）」が、作者の関心を唆ることになる。

一九一五年当時の漠たる期待感から、ヴェルダン以後の真っ暗な絶望感を経て、彼はいまや、不可知な未来に対する一種の不安と、過去との断絶という彼にとって苦手なものへの諦感を一歩進めて、新しい転進へ順応するという、雄々しい覚悟を決めていた。いったんそう決めると、彼の精神は却って、未来への希望に開かれてゆくのであった。

私はそうした新しい世界の観客に、いやおそらくはその俳優のひとりになることを楽しみにしています。そしてこうした意味で、人びとの心をこれほど老いこませたこの恐ろしい戦争も、一種の若返りとなるのです。（イヴォンヌ・ド・コペ宛、一九一七・一二・二四）

デモクラティックな混沌のなかで未来が震えているのを感じないような人びと、その未来に、彼らの知性や教養や批判力の拠りどころを拒否する人びとこそ、気の毒な存在だ！　そうした人びとを見ると僕は、一七九〇年から王制復古にかけて、フランスで起こっていた事象を直視することを拒否し、秩序や経験への小心翼々たる盲目的崇拝によって、死んだ形式にすがりつき、ルイ十八世の即位が大革命のあらゆる痕跡を決定的に拭い去るだろうと、まじめに考えていたあの亡命者たち（アクシオン・フランセーズが引き合いに出すメーストルだのボナールだのといった人たち）を思い出す……（ガストン・ガリマール宛、一九一七・一二・二五）

文学相談

一九一八年マルタン・デュ・ガールが『ジャン・バロワ』への反省から、自分の作家としての未来の方向づけについて悩ましい懐疑に陥り、友人の意見を徴するためにみずからの切なる疑問と模索とを率直に書き送って、それへの友の反応を判断の材料にしようとしたことは、N・R・F誌・一九五八年一二月一日号に収録されたピエール・マルガリチスとの往復書簡『文学相談 Consultation littéraire』によって、すでによく知られているところである。この文学相談は同時にマルセル・ド・コペにもなされていたのであるが、コペとの往復書簡が小説家の遺志によって特別扱いにされ未公開のままなので、これまではマルガリチスとのものだけがわれわれの目に触れる資料となっていた。だがこのたびの『一般書簡集Ⅱ』は、もうひとりの友ジャン・フェルネになされていた「文学相談」についても知らしめてくれることとなった。ただし、それをマルガリチスとのものに照合してみると、内容的に殆んど同じものであるので、それを跡づけてみても、屋上屋を架す憾みなしとしないのであるが、これら一九一八年の一連の「文学相談」が、というより、この相談に一方的に述べられているマルタン・デュ・ガールの決意が、『チボー家の人びと』に取

りかかる際の作者の精神的態度とその小説計画に決定的因子として働き、それがやがては『父の死』を境とする作品の前半と後半とのあいだの懸隔、そして例の計画大変更、を招来する原因ともなったことを考えて、マルガリチスとの相談を補強する意味でも、一応これに目を通しておいたほうがよいと思う。

それにこの『書簡集』によって、「文学相談」へと彼を押しやるにいたった精神的動機がかなり明らかとなるし、またそれに対するフェルネの反応を知ることもできるのが、付加的興味としての価値があると思われる。

マルタン・デュ・ガールがそれまでの自分の文学生活ならびに自作品について否定的反省を強いられ、懐疑に苦しむようになった直接の動機は、前年の一〇月から携った『ジャン・バロワ』再刊のための校正という仕事を通じてであった。『ジャン・バロワ』のブリュージュにあった組版がドイツ軍によって破壊されたため、再刊には全面的な校正のやり直しが必要だったらしく、それもパリと戦地という遠隔に災いされて、かなり長い期間を要したもののようである。

去年の秋、僕は苦しい反省をして過ごした。いまは、数週間このかた『バロワ』の再刊のための訂正をしている。取り返した失地の廃墟に埋ずもれ、かなり苦しい内省に耽り、幸か不幸か四週間病気になって、照明の行き届かぬ待避壕の奥、とはすなわち、しんみりと瞑想するのに都合のよい奥のほうに寝かされて、僕は自分自身についての幾つかの苦しい真実を反芻することになった。そしてそこから、いくらか目をしばたきながら、自分を見失って出てきた。僕は「相談」する必要を感じている……（ジャン・フェルネ宛、一九一八・一・二二）

彼は別の個所では、『バロワ』の校正は瀕死の人間の悪寒と油汗なしではやれない、まるで地獄の責苦だ、と告白している（モーリス・マルタン・デュ・ガール宛、二・二一）

さていよいよJ・フェルネへの Consultation littéraire（一九一八・三・一二）であるが、そこでは『バロワ』への反省が次のようにぶちまけられている。

いま再刊のための校正をやっている『バロワ』は、――なんでもござれの――思想をつめこんだプラムプディングだ。敢えてそれを、おそらくは知的で知識にみちた書、一種の漠として初歩的な百科事典、と言うことができるかも知れない。今世紀の諸問題のどれ一つとして、この書のどこかで少なくともかすかに触れられていないものはないと思う……ところが、思想の書としての『バロワ』、『バロワ』の錯綜とその弁証法については、ごつごつして、柔軟性のない、とくに田畑を鋤く牛のような忍耐強さで支えられた、ある知性以外のものをみずから感ずることは殆んどできない。

もし『バロワ』になにがしかの価値があるとするならば、それはまさに、人間バロワの肉体の盛衰と感情生活の推移の描出にあるのであって、ごてごてした宗教論議だの考証的なドレフュス事件の記録だのにあるのではない。

あのぎっしり詰めものされた『バロワ』のなかで最良のものは、人を感動に誘うもの、つまり、第三部のバロワの老衰ということなのだ。それも、知性の老いこみや思想の老耄というより、肉体と心情における人間の老化ということであり、その肉体的失墜、病を前にしてのあの死ぬほどの不安、（多くの読者に、作者が悟りきった老人ではないかと想像させた）あの寄る年波と死による希望喪失なのだ……。

これは『バロワ』に限らず、『生成』についても同様のことが言える、と彼は回顧する。

遠い昔の作品『生成』のなかで最良のものは、偽芸術家が、永続性ある作品を創造して、永遠の仇敵たる忘却、時間、死に打ち勝とうとするときの無力感であり、殆んど知的と言ってよい落伍者が、日毎に施す手もなく、台なしにしてしまったおのが人生を前にしてのあの胸張り裂ける苦悩だったのだ。それに比べれば、雑然たる思想の推積などはなんの重みもありはしない……

要するにこれは、文学が専念すべきものは、人間そのものであって、思想や歴史などではないという認識につきるのであり、その基底に、過ぎゆく時間、死に堰きとめられた生という不条理観が見てとれるのであるが、すでに見たように、戦争の後半に差しかかって、彼がフランスの将来に思いをいたし、殊のほか社会的、思想的な思索を巡らせていた時期に続くものとしてこれは、些か背向的という印象なきにしもあらずという感がする。現に彼自身も、次のように言う。

僕は自分が――それに戦争というものがますますその道へと必然的に僕を押しやったのだが――なんと言ったらよいか、思想的な作品、定理小説的な作品、半社会学的で、半哲学的な作品へと惹きつけられるのを感ずる……というか、より正確には、僕の想像力や感受性が記述せしめる作品のなかに、イデオロギー的思弁を詰めこむよう、僕は誘われる。もしくは、いやおそらく僕は、そのように断罪されているのだ。と言っても僕の場合、それはたんに作為的な態度というのでもないのだが。僕は本当の意味で現下のあらゆる諸問題に関心を持っている。好奇心は多種多様に及ぶ。それほど多くの事に自分が無知なのに、絶望させられるのだ。僕はたゆまずに例の資料集めに奔走し、獲得し、殖やしつづける。僕のなかには、古文書学院生が生きつづけている。社会学や哲学や政治の何かの問題について、幾ばくかのノートをとらぬ日は一日もない……。

では、このような旺盛な社会的、政治的関心、イデオロギー的模索に追い立てられている頭脳が、どのようにしてそうした思想性を拒否して、純粋に人間感情の研究に専念せねばならぬと考え得るのであろうか。

ところが時どき、まるで雲を引き裂く雷(いかづち)のように、自分が誤った道に携っており、借りもののネッソスの下着の下で死にかけており――自分自身に背を向けているのだという、真底からの目まいにも似た啓示を受けることがあるのだ。解ってくれるかね？大まかに言って、以上が僕の言う疑惑なのだよ。僕は時おり、僕の真の芸術、僕の独自の（とは、自分だけのもので他の誰のものでもないものを、自分のうちで発展させる、という意味だが）僕らしい価値は他の場所にあるのだ、という悲劇的な思いにとり憑

かれることがある。

そして彼は、自分が選びがちなその「誤った道」が「盲目的なボヴァリスム un bovarysme aveugle」と称すべきものであり、「虚偽 un mensonge」に過ぎないと判断する。「自分自身を知ること！ Se connaître soi-même！」、じつはこれこそが、つねに途方もないボヴァリスムに駆り立てられるいっぽうで、絶えず自己批判に責め立てられ、自負と謙虚という両極のはざまで生涯苦しんだこの小説家を、もっともイデオロギー的思索に傾いた筈の時期に、その反対の極へと逆戻りさせずにいなかった、本音の囁きだったのである。

彼はこの時にいわゆる建て前のための無駄な努力に切りをつけて、自己の本音に忠実に従おうと決意したのだと言ってよい。マルタン・デュ・ガールという人物が現実生活面で決して建て前のために身をやつす人ではないことは、彼の大戦中の容易に欺かれることのない徹底した反戦思想と、そのなかでの運命に従順な軍務の履行とが、何よりもよくそれを物語っていた。この人に最も縁の遠い言葉は、見せかけ、建て前、迎合ということであった。しかるに彼は、芸術制作の面においては、ともすれば自分がしばしば本音を犠牲にして、社会的、客観的評価のために殉ずるという傾向があることに気がついたのである。そして彼は、それを「盲目的ボヴァリスム」と呼んだのであった。彼はその過ちを次のように説明する。

次のことも告白させてもらおう。人びとは時どき、生まれながらの小説家 (le romancier-né) においてのみ開拓され得るが、後天的に獲得できるものでないあの生の天稟 (ce don de la vie) を、僕が所有していると言ってくれる。それは本当であるのかも知れない。自分でも無邪気にそう思う時がよくある。ところが、その天稟を利用し、脇見をせずにそれに献身し、直接的観察によって不断にそれを肥やそうとはせずに、僕は部屋に閉じ籠もり、本を漁り、抽象的問題に関するノートを山積みにし、日に十種類

もの新聞をめくって、そこにその時どきの捕えがたい真理を見出そうと身を粉にし、「宗教」だの「倫理」だの「社会主義」だの「進歩」だの「祖国」だのといった書類で引き出しをいっぱいにしている哲学々級の永久留年生のように、果てしもなく勉強に憂き身をやつす……（以上、ジャン・フェルネ宛、一九一八・三・一二）

要するに彼が相談したかったのは、ここで不自然な半思想家（demi-penseur）的ポーズをかなぐり捨てて、「私の書庫から外へと踏み出して（sortir de ma librairie）、生きている個々の人間たちの上に、人間たちの感性的構造の上に、彼らの悲惨や情熱や善意の上に、それらを理解し表現するよう宿命づけられていると思われる友愛の目を集中する」（同前）ことに専念したいと思うがどうか、ということだったのである。これと同じ相談を受けたマルガリチスは、今更なぜそのように性急な二者択一的態度の決定が必要と考えるのか、思想研究も人間研究も臨機応変に自由になされてよいのではないか、そのような窮屈な問題にこだわるのはおかしい、というごく当たり前の忠告を与えている。一見すると、この当たり前の意見が常識的に妥当な考えかただと受けとれる。しかしマルタン・デュ・ガールは、それに対して、「これは私にとって生死の問題なのだ」と答えるのである。

この相談が彼にとって「生死の問題」であったのは、彼の脳中にすでに『チボー家の人びと』となるべきものの兆しが、『善と悪』という標題のもとに芽生えていたからである。そしてそれへのいまだ漠たる予測が、当然すでに述べたような、戦場で彼が垣間見た未来社会の展望と、深く関係づけられていたからである。彼がその関係に立脚して小説を構想するならば、それは当然社会的・思想的・イデオロギー的要素を主柱とする構造への方向をとらざるを得なかったであろう。彼が戦地にありながら、資料渉猟に熱中し、ノートを集積していたのは、そのためであった。彼はジャン・フェルネに次のように書いている。

本当の意味で現下のあらゆる諸問題に関心を持っている。……僕が何か社会的、哲学的、政治的な問題について、なにがしかのノートをとらぬような日は一日もない。戦闘のさなかにあっても、何かの抽象的な書を繙かぬような日、雑誌の切り抜きや新聞記事の分類をしないような日は、一日もない。（一九一八・三・一二）

しかし、『ジャン・バロワ』の校正を始めたことにより、彼はそのような心的態度が「自分自身に背を向ける」ことになるという警告を得ることになった。それに、すでに見たように、彼が見てきた生なましい兵隊たちの現実は、彼の心底に、あらゆるイデオロギーからデマゴギーにいたるまでの空虚な大言壮語、そして彼が近代神秘主義と呼ぶすべての思想への不信感を植えつけていた。彼に戦後社会の変革を期待せしめたのは、そうした「新シェルピス主義的アクセサリー」を、思想の名においてではなく、「パンと葡萄酒と媾合の名において」一掃するだろうところの、民衆の粗野な良識というものになってきた。彼が信をおいたのは、やはり思想にではなくて、人間感情にであったのである。

フェルネはマルガリチスとは些か異って、友の反省と方向転換の意志に大賛成であった。それはフェルネが『ジャン・バロワ』のなかの歴史的、思想的な要素にあまり感心していなかったためであろう。『書簡集』の編者は、とくにフェルネの返信を「註」のなかに収録してくれている。彼はそのなかで、「君の場合、これまで、古文書学院生が作家を台なしにしている」と書いて、次のように述べているのである。

（君の内なる天分の声に）耳を藉し給え。それこそが君の進むべき道なのだ。……君は近い将来に、人間性の線に沿った、広大で苦悩にみち、明晰で豊かな、偉大な書を書くことを君に許す天稟を所有しているのだ……（マルタン・デュ・ガール宛、一九一八・五・三〇）

フェルネの返事がマルタン・デュ・ガールの決意を固めさせた、と言うことはできない。マルガリチスとの往復書簡を見ると、マルタン・デュ・ガールはすでに、誰がどのような反応を見せようとも動じないだけの決意を固めた上で、相談していることが解るのである。相談は、むしろみずからの納得を補強するための試行に過ぎない。この特徴的傾向は、後年『一九一四年夏』制作時の、マルセル・ラルマンへの相談にもよく現れているところである。

かくして戦後『チボー家の人びと』は、少なくとも初めの数巻において、じっくりと腰を据えた、心理主義的で人間研究的な一種の家庭小説の趣きをもって出発することになるのである。そしてこれが、この大河小説の後半にかけて、それこそ芸術の生死にかかわる深刻な問題に逢着する原因ともなる。

死に急ぐ人びと

戦争はマルタン・デュ・ガールの多くの親友の生命を奪い去り、またこの動乱の期間中に、病のために不帰の客となった心の師や友も少くなかった。「私は戦争ですべての親友を失った」と彼は書く。

これら大戦中に世を去った人びとのうちから、マルタン・デュ・ガールの文学生活に看過し得ぬ係わりを持つと思われる人びとの死について、『書簡集Ⅱ』の伝えるものを拾ってみよう。

最も早く戦死したのは、フェヌロン校以来の学友ギュスターヴ・ヴァルモンである。

ヴァルモンは一九一四年九月六日、単身危地に身を挺し、敵前に散った。この日ヴァルモンの中隊は退却の途上、小さな森から四〇〇メートルの地点に達して停止した。中隊長は、その森に敵がいるかどうかを偵察するために、下

士官のうちから斥候を募った。ドイツ軍がフランスへと押し寄せつつあったところから、フランスの敗戦を思って絶望していたヴァルモンは、即座にその役を買って出て、三人の兵とともに森に近づき、敵の狙撃を受けて戦死したのである。

この行為が示すように、ヴァルモンは熱烈な愛国主義者であり、ドイツ撃つべしという熱意に燃えていた。彼は思想面において、しだいにマルタン・デュ・ガールと相容れぬようになっていた。しかし、それを除くと、ふたりの友情は終始深いところで結ばれていたのである。

私はヴァルモンにおいて、私の最も旧い友を失いました。いまだにその空隙の大きさを測ることさえできずにいます。この死を前にすると、たかだか三、四年このかたのふたりの思想の相異などは萎んでしまい、何物でもなかったように思えます。いまは一七年間のふたりの友情のことしか考えられません。またそのうちの一五年間は、翳り一つなかったのですから……（マルセル・エベール宛、一九一五・二・七）

マルタン・デュ・ガールは続けて、「一八歳から三〇歳にいたるあいだの、社会主義からアクシオン・フランセーズへのヴァルモンの転向」は、一つの世代の一部に共通な傾向であったのだから、ヴァルモンの遺稿を出版することには意義ある、として、ヴァルモンの小説のほかに、覚え書や手紙を世に出すべきだと述べている。

ここでヴァルモンの死を採り上げたのは、小説『ジャン・バロワ』の後半に登場して主人公と意見を交わすアガトン流愛国主義者の青年のモデルとして、ヴァルモンその人が、もしくはヴァルモンとの戦前の論争の記憶が用いられたのではなかろうか、という推測が可能だと考えられるからである。それを暗示するものとして、次にアンリエット・シャラソン嬢に宛てた手紙からの引用を示すことにする。マルタン・デュ・ガールはそのなかでヴァルモンとの細

やかな友情について述べると同時に、思想の違いについて説明したのち、次のように書いているのである。

貴女が『生成』によってしか私を御存知ないのが残念です。もし『ジャン・バロワ』を読んでいて下さったら、おそらく、ヴァルモンに対する私の友情がどのような性質のものだったかを知って、もっとお驚きになったことでしょう。「自由な努力」(エフォール・リーブル)誌が実際に(アガトン流の青年についての)ある個所を掲載しているのです。しかし貴女がおっしゃっている個所は、私がごく親しい友情で結びついている「新フランス評論」(ヌーヴェル・ルヴュー・フランセーズ)に掲載されたものなのです。それを憶えていて下さったのは嬉しいことです。それに、ヴァルモンが『ジャン・バロワ』を読むよう貴女に勧めることを躊躇しなかった訳ですから、――彼はあの小説をいつも机上に置きながら、努力と苦痛もて断片的にしか読むことができなかったのですが――貴女に一冊お送りさせて頂きます……(シャラソン宛、一九一六・二・三)

右の引用文中、私が傍線を施した部分(とくに最初の部分)は、ヴァルモン・モデル説の根拠として薄弱に過ぎるとは思われない。

アンドレ・フェルネの敵陣地への墜落死もまた、未来の小説主人公の運命との類似ということで、ある種の憶測を誘うものがある。

騎兵隊から空軍に移籍し、爆撃隊に所属した将校アンドレ・フェルネは一九一六年六月一日、ドイツ領空で戦闘中、塔乗機の墜落で戦死した。一時は墜落後捕虜になったという情報が流されたが、間もなく誤報であることが解ったのである。これだけをもってしても、親友の前線での墜落死が、『一九一四年夏』のジャック・チボーの前線飛行、墜落、捕虜、そして死、の着想に幾ばくかの関係があったかも知れぬという憶測を誘い出す。

問題は、アンドレの戦死がみずからが進んで求めた死、言い換えるならば覚悟の自殺ではなかったかという疑い、

しかもその自己犠牲の行為が、アンドレとマルタン・デュ・ガールが少し前に交わした激しい論争の帰結としてとられたものではなかったか、という疑いが、二、三の親しい者たちのあいだに残されたことである。この問題についての救いようのない悲しい思いが、モーリス・レイとジャン・フェルネとピエール・ランに宛てた手紙のなかに吐露されている。

もし彼がみずから死を求めたのだったら、僕は大きな悲しみに襲われるだろう。またここに、僕が率直さという厳しい扱いで苦しめ、そのために感受性がしばしば傷つくことになった、もうひとりの友がいたことになる。僕は自分の粗野な誠実さを、苦しい思いで悩むことになるだろう。そこには、真の友情が隠されていたのだけれど……（モーリス・レイ宛、一九一六・六・一三）

「もうひとりの友」とは、前述したように、これまた相反する思想のゆえに彼としばしば激論を交わしたのち、マルヌ戦線で危険を省みず敵陣に接近して壮烈な死を遂げた、あのギュスターヴ・ヴァルモンの英雄的行為を思い出してのことである。『書簡集』の「註」に、アンドレ・フェルネがマルタン・デュ・ガールに送った最後の手紙の全文が、例外的に収録されているのは、編・註者がフェルネの死の真相に出来るかぎり照明をあてようとする心遣いによるものと考えられる。それは死の二か月前のもので、この上なく激しい語調で友の反戦思想を利己主義の故をもってなじり、自分が飛び込もうとする烈しく崇高な義務遂行の愛国的行為をそれに対抗させた、長文の手紙である。

エベールの埋葬の日、ペール・ラシェーズ墓地からアンペール街までの動揺にみちた道のりのあいだじゅう、僕たちが交わしたあの苦しい会話のことを、君にはおそらく想像もできぬほどしばしば、僕は考えつづけてきた。長いあいだためらったのち君に手紙を書く決心をしたのは、君が戦争について書く筈の小説のことを、考えるからなのだ。僕はおそらく戦争の終結を見ることはなかろうから（一昨日もまた僕は、上空から超スピードで襲いかかってくる敵機四機と一五分間闘った。いまでもどのようにして逃

げおおせたのか、自分でも解らない）、どうしても若干の考えを述べておきたいし、この手紙を、君がすでに収集を始めているに違いない準備段階の資料に加えてくれるようお願いしたいのだ……

君が書く筈の、そしておそらく僕が読むことのないその小説の内容を、僕がすでにどれほどよく解っているか、君には想像もつくまい。君が現場の一証人の作品として発表することによって、その小説は権威を持つことになろう。ところが、君は証人ではあり得ないし、そのように発言する権利もないのだ……

君が僕をどう考えているか、僕はよく知っている。君はまず僕を好戦的な神がかり的人間として、ついで好戦的なぐうたら軍人として、そしてつねに気違いとして扱ってきた。僕が自分の生命を危険に曝すのを刺激性の強いスポーツと見做し、自分になんの準備もできていないその務めを果たすのをいかにも楽しんでいる、と考えてだ。それは間違いないのだよ。それは、まったく別ものなのだ……

われわれはいま、文学などに専念している時にはいない。文学者たちのうちでどれほどの人が死んで行こうとも、僕の考えでは、そのために書かれないであろう原稿のページの偉大さより、いまのいま、行為や事実によって、さらにより多くの偉大さが積み重ねられているのだ……

とくに、僕が君を非難し、戦いに駆り立てるためにこれを書いていると、思わないで欲しい。僕の立脚点は、まったく違うのだ。何よりも、君が収集している資料に、一つの資料を付け加えるということなのだ……

われわれが生きているこのおぞましさのなかから、自発的に崇高な行為が生まれ出てくる。しかも、とくにそのような準備の出来ていなかった人びとのうちに、現実的に彼らを優れた人間性の次元に置く、あの自己犠牲の受容が生まれてくる。こんな時代がこれほど多くの英雄、もしくは超人を誕生させ、そのあと直ちに彼らを滅ぼしてゆくのを見るのは、この時代の大きな矛盾の一つなのだ。しかし滅んだあとに、少くとも彼らの思い出は残されることだろう……（アンドレ・フェルネ発、マルタン・デュ・ガール宛、一九一六・四・一三）

このように書いて死地に飛び立って行った友の散華は、小説家に大きな衝撃を与え、その脳裡に深い傷跡を残したのに違いない。ジャック・チボーの前線ビラ撒き決死行のモデルとしては、大戦中やはり反戦ビラを撒布しようとし

て地中海に墜落死した、イタリア人飛行士（Lauro de Bosis）がまず考えられるのであるが、この『書簡集』に接するに及んで、ビラ撒布という要素こそ欠如しているものの、より身近かでより強烈な、投企的行為として昂揚された決死的飛行のもう一つのモデルが、ここで併せ考え得ることを知らされる思いがする。

アンドレの最後の手紙に対して、マルタン・デュ・ガールは返事を書いているのであるが、そのなかで彼は、アンドレが考えていたようには戦争を題材にした小説を書く気持ちがないこと、動員以来ほとんどノートをとってもいないこと（これは二年後のJ・フェルネへの「文学相談」で言っていることと異っている）を付け加えている（一九一六・四・二七）。

マルタン・デュ・ガールはアンドレの死を、アンドレの性格と思想から予測可能なものだったのだと回顧する。すなわち、人間には、自殺に不適な者と、自殺の可能性を前もって秘めている者とがあるが、アンドレはその後者に属する、またかのギュスターヴ・ヴァルモンもこの種の精神に属する、と考える（モーリス・レイ宛、一九一六・六・一三）。そして、これら純粋な精神たちを駆り立てて死へと追いやる「エコー・ド・パリ」紙を、この上なく罪深いものとして憎むのであるそして戦線を上空から見降ろすという飛行士の視点が、地上で行われている戦争の厭悪すべき現実の発見よりは、むしろその抽象化と美化へと彼を向かわせ、彼を愛国的理想主義者の神秘的で英雄的な死へと突入させた、と推察し、「Le rêve avait remplacé pour lui tout le réel, et définitivement」と書き（ジャン・フェルネ宛、一九一六・七・二一）、「Il voyait la guerre de très haut ; il passait sur les tranchées si haut qu'il n'en a jamais vu les horreurs. Il est mort dans son rêve. J'imagine que ses derniers moments de conscience ont été d'une exaltation surhumaine qui a dû alléger son sacrifice」と評するのである（ピエール・ラン宛、一

九一六・七・二三)。

このような理想主義的精神の亢りと、模範的行為としての決死行への喝望を、『一九一四年夏』の作者はその「準備段階の資料に加えて」、彼の主人公ジャックにも与えなかったかどうか。両者の思想的立場は、かたや愛国主義、かたや反戦主義というように、まったく正反対のものであったとしてもである。

このほかにも、一九〇三年の入営当時からの軍隊友だちミシェル・フルーリがヴェルダン北方の戦場で一九一六年五月五日に死に、少年時代からの友で作家のピエール・カンタン＝ボーシャールも、一九一六年一〇月八日に戦死した。後者の英雄主義を、マルタン・デュ・ガールは批判していた。われわれはマルタン・デュ・ガールの気質的な反英雄主義の徹底ぶりを、『一般書簡集』で嫌というほど知らしめられる。

戦場の露と消えた若い同輩たちのほかにも、終戦の日を待つことなくあの世への旅立ちを急ぐ、親しい人びとが相ついだ。マルセル・エベール、フェリックス・ル・ダンテックなどの著名人、それにいとこのピエール・マルガリチスなどである。

エベールは一九一六年一月初めから躰に不調を来たし、アントワーヌ＝シャンタン街の病院に入院した。摂護腺を病み膀胱結核に冒されて、医師のゴセ博士は彼を数か月の命と判断し、死にいたるまでに必ず通らねばならぬ恐ろしい苦しみを慮って、いちかばちかの手術を一月一一日に施すことに決めた。この医師の決断が、死苦を人生最大の悪として恐れたマルタン・デュ・ガールに、エベールの死後次のように書かせたのは、当然であった。

Il a donc très bien fait de tenter tout pour éviter même par une mort plus proche cette affreuse perspective.（マルセル・エベール宛、一九一六・二・七の書簡に添えられた覚え書「La Mort d'Hébert」一九一六・二・一九）

手術決定の報を受けたマルタン・デュ・ガールは、一九一六年二月七日付で一通の手紙をエベールに送った。それは旧師の近い死を確実に感じとった者が、決して訣別の言葉を口にすることなく、しかも師に、現世での自己に対する十全の満足感と、残される者たちの追憶のなかでの自己の存続の確信をしかと与えて、師を清澄さもて運命に対峙させようとする、毅然たる愛と、真の友情からの誠実に溢れる一文となった。そして彼は、やがてエベールの埋葬に際して匿名で朗読されることになるこの名文を、「もし私がおそばにおれるものなら、私はあなたの清澄さのなかに私自身への力づけを求めつつ、ただ黙って、あなたを抱擁することで満足したでしょうのに」という言葉で結んでいる（マルセル・エベール宛、一九一六・二・七）。

二月一三日、エベールの世話をしていたBour夫人から、二月一一日の手術成功の報が届き、それを追うように二日後の一五日、エベールが一二日に死亡したとの報せが飛び込んできた。その司令部からの報せには、葬儀の日取りとともに、それに参列するための特別賜暇の許可が添えられていた。マルタン・デュ・ガールはその翌日、貨物列車の有蓋車輛に便乗してパリに帰り、アントワーヌ＝シャンタン街の病院にタクシーで駆けつけた。病院の地下安置所で彼は、手術の前日に届いた彼の手紙にエベールが感動し、一日中ベッドのなかでそれを抱きしめ、顔を喜びで輝かせつつ、見舞いにきたすべての人にそれを読んで聞かせたと、居合す人から教えられた。

エベールの最期の言葉は「Maintenant, mes yeux se troublent」であった。彼はカトリック司祭の訪問を拒絶

し、終油の秘蹟は受けなかった。火葬はカトリックの僧侶でなく、プロテスタントの牧師 Monod によって進められた。そこには、アンドレ・フェルネ、ブール博士、サロモン・レーナク、アルフレッド・ロワジー、アルベール・ウータンなどが居合せた。聖書からの一節が誦せられ、マルタン・デュ・ガールのあの手紙が朗読された。それからかなり長い弔辞があって、「我らの父」が締めくくりをつけた。荼毘を待つあいだに、マルタン・デュ・ガールはアルベール・ウータンに初めて紹介された。やがて『象徴主義の司祭・マルセル・エベール』を刊行して、そのなかにマルタン・デュ・ガールのエベール追悼文『証言』をも収録することになる、このカトリック近代主義の重鎮は、その後しばらく小説家と、エベールの思い出を中心に、文通を続けることになる。ポール・デジャルダンも遅れて姿を現わした。

このペール・ラシェーズ墓地からタクシーでマルタン・デュ・ガールの家に向かう途中、すでに述べたアンドレ・フェルネと小説家との激しい議論が交わされた訳である。（以上、「La mort d'Hébert」より）

小説家はピエール・ラン宛の手紙のなかでは、「エベールの死は立派で、意識的で、決然として、彼の高貴な生にふさわしいものだった」と書き（一九一六・三・一）、モーリス・レイには「彼の死は単純で、確信にみち、輝かしいものだった。まさにリュスの死だ」と書き送っている（一九一六・三・六）。

エベールの世話をしたアルベール・ブール夫妻は、毎月エベールの命日に生前親しかった人びとを自宅に集め、故人を偲ぶ会を開くことにした。その会を中心に、アルベール・ウータンは、いわば「エベール追悼論集」とでも言うべきものを編纂する計画をたてた。この計画にマルタン・デュ・ガールは、『証言――追悼（メモリアム）の辞』となるものをもって参加する意図を固めていた。

エベールは生前、部屋の煖炉の上に、ミケランジェロの「鎖に繋がれた奴隷」のコピーを置いていた。マルタン・デュ・ガールは『ジャン・バロワ』の初版本の扉に、そのコピーを印刷させていたのである。エベールの死後、ブール夫人からそのコピーをマルタン・デュ・ガールに受け取って欲しいという手紙が来た。それは彼にとって、この上なく似つかわしい友の形見分けであった。彼はその喜びを、次のようにアルベール・ウータンに書き送っている。

ブール夫人から、「鎖に繋がれた奴隷」が私のためにとってあるという、手紙を受け取りました。この配慮にどれほど私が感動したか、またどれほど喜んだか、それは言い尽せません。それは私にとって、われらが偉大な友の最も生きいきした形見なのです。私はそれを大事にしたいと思います。それはエベール師の生涯の証人であったように、私の全生涯の証人ともなってくれることでしょう……（一九一六・六・二二）。

「フィガロ・リテレール」紙・一九五八年八月三〇日号のジャン・ドレー博士の「Dernières rencontres」を見ると、マルタン・デュ・ガールが晩年にいたるまで、旧師のその遺品をどのように大切にしていたかが解る。

Lorsque, rue du Dragon, il avait été très gravement malade, il avait fait mettre en face de son lit une reproduction de L'Esclave de Michel-Ange, qui symbolisait à ses yeux la vie de Jean Barois, l'homme prisonnier de ses mythes, afin de ne pas céder à ce qu'il appelait《la défaillance》de son héros.

アルベール・ウータンはエベールの伝記を綴るという考えを進めていた。それに対してマルタン・デュ・ガールはウータン以上にその仕事への適任者はないと喜びの言葉を呈し、自分も黙している訳にはいかぬと考えるので（Je ne puis me résoudre au silence total）、三〇ページほどのものに過ぎないが、短い回想記を寄せたい、という考え

を述べている（アルベール・ウータン宛、一九一七・三・四）。そしてその後、ウータン宛の別の手紙で、すでにそのためのノートもとり、自信もできているので、計画実現の明確な約束（la promesse formelle d'exécuter mon projet）をする、と書き送っている（一九一七・四・一一）。しかし「註」に見るように、マルタン・デュ・ガールは一九一六年春すでに、エベールについての回想を書いていたもののようである。この『Témoignage : In Memoriam』は、一九二一年 Grou-Radenez 社から五〇部の出版を見、次にアルベール・ウータンの『Un prêtre symboliste, Marcel Hébert』（Rieder, 1925）に収録され、最後にプレイヤッド版『マルタン・デュ・ガール全集』（1955）に含められることになる。

フェリックス・ル・ダンテックは一九一七年六月、パリのビュフォン病院で死亡した。新聞でその報に接したマルタン・デュ・ガールは、一一月になってから、ル・ダンテック未亡人に丁重な文（ふみ）を送り、最大級の言辞で故人への尊敬と感謝の念を表明し、弔意を捧げた。

私はル・ダンテック先生とお目にかかったことはありません。しかし十年このかた、先生の御著書は私の精神形成の上に、ますます大きな影響を及ぼしつづけました。一九一三年に、長いあいだ躊躇したのち、私は先生に、拙著『ジャン・バロワ』をお送りしました。それは学問的なところは何ひとつないものですが、私の誠実さのすべてを投入した書でありました。先生は、私について何も御存知なかったのに、すぐに読んで下さいました。そしてお手紙を下さったのですが、私は先生のこの最初のお手紙を、決して忘れることはできないだろうと存じます……（一九一七・一一・二三）

ル・ダンテック夫人から故人の写真とともに返事がきたが、そのなかには、マルタン・デュ・ガールの少年時代に

遡る、彼とル・ダンテック夫妻を繋ぐ奇しき因縁が存在していたことが告げられていた。すなわち遠い過去に、ロジェがヌイイの祖父母の家にいたころ、彼にはニコル・ド・マルテルという幼な友達の少女がいたが、この女性がのちにル・ダンテック夫人のいとこにあたるピエール・デューグと結婚し、フェリックス・ル・ダンテックはこのデューグ夫人の腕のなかで息を引き取ったというのである。「そんな子供時代の微笑ましい想い出と、現代思想全体の重大で苦悩にみちた喪とを結びつけること」はなんと奇妙なことだろう、とマルタン・デュ・ガールは夫人に書き送っている（一九一七・一一・三〇）。ル・ダンテック夫人は亡夫の一周忌にあたって、ソルボンヌの生物学教授 Charles Pérez のル・ダンテックを偲ぶ小冊子をマルタン・デュ・ガールに送付し、彼を殊のほか喜ばせることになる（フェリックス・ル・ダンテック夫人宛、一九一八・五・二三）。

小説家がその芸術的才能に最も信を置き、誰に対するよりも深い愛情を傾けていた、いとこのピエール・マルガリチスが、一九一八年一〇月三〇日スペイン風邪のため、ビュフォン陸軍病院で急死した。マルガリチスはその年の一月から死の一か月前の九月まで、すでに触れた小説家の『文学相談』に応じていたのである（そのときの往復書簡はN・R・F・一九五八年一二月一日号に収録されている）。この最愛の友の喪失は、マルタン・デュ・ガールにとってこの上なく悲痛な打撃となった。『一般書簡集Ⅱ』のなかでは、フェルディナン・ヴェルディエへの手紙のなかで「私は永遠に手足を切断されてしまった」と書くいっぽうで、ガストン・ガリマールへの手紙のなかに、マルガリチスの最後の模様についての簡潔ながら正確な記録を残している。この死は『チボー家の人びと』と深い関係を持つので、その記録を引用しておくことにしよう。

彼は独りぼっちで死んだ。恐ろしいほどの独りぼっちで。彼の妻も、母もヴェルサイユで病に伏せっていたのだ。彼は父親にしか会っていない。彼は数月前から死を感じとっていた。恐ろしい直面だった。誰にも増して、苦しみと死を神経質に恐れていたのだから。彼はその死がやってくるのを見た。そこで最期の日を、幾通かの手紙とノートを書きしるすために費した（それは省略しなければならなかった）。父親が夕方にやってきた。彼は父親にそばについていて欲しいと頼みこんだ（自分が死んでゆくのを誰かが見届けてくれるように……と）。だのに父親は、安心させようという配慮から、またそれほど終焉がはやく来るとも思わなかったため、夜勤のシスターに息子を預けて、帰ってしまった。どんなにか悲痛な思いだったろう。臨終苦が始まった。彼は明けがたに死んだ。死ぬ前に、看護婦に妻への別れの言葉と、次のような言葉を書きとらせた――「僕の簡単な死にかたをロジェに告げること」。僕はパリに駆けつけることができた。そしてビュフォン病院の地下室に、変わり果てて、独り放ったらかされ、花ひとつそなえてない遺体を見出した。部隊に戻ってみると、彼の最後の手紙が届いていた。鉛筆でこう書いてあった。「僕は一文なしだ。君が僕の全仕事を焼き払わせるよう頼む（？）。不運だがこうなってしまった。君を抱擁する。ピエール。」彼は司祭のお勤めを拒否してあった。まったくの独りぼっちで死んだのだ……（ガストン・ガリマール宛、一九一八・一一・一一）

マルタン・デュ・ガールはマルガリチスが彼に遺した指輪を、生涯その指から外すことはなかった。

『チボー家の人びと』のジャックは、作者自身の人格二分割による分身であると同時に、ピエール・マルガリチスを写したものであるとも考えられている。そしてこの小説は、「死が悩み多く純粋なるその心のなかに熟しつつあった力強い作品を無に帰せしめた」この夭折の友に捧げられているのである。

『一般書簡集Ⅱ』の「註」には、引用した手紙文中に見られる「僕の簡単な死にかた……」というマルガリチスの遺言が、そのまま『チボー家の人びと』最終巻『エピローグ』の最後において、アントワーヌがみずからに安楽死を与えるための注射をするときの「思ったより簡単だ」という言葉に、そのまま移し置かれている、という断定が見られる。

作　品

大戦中マルタン・デュ・ガールは、激しく危険な前線補給輸送という任務の間隙を縫って、あるいは僅かな賜暇の期間を利用するなどして（賜暇は全期間を通ずるとかなりの回数に及び、妻子と落ち合う機会も少くなかった）、砲火の轟きに耳を引き裂かれながらもペンを捨てることなく、制作の想を練ることを止めなかった。殆んど北ヨーロッパ戦場のすべてを駆け巡るトラック輸送班の班長として（一九一七年には准尉になっていた）、その責務を誠実に果たしつつ、寸暇を惜んで作家としての仕事を継続したのである。それは貨物自動車の「縦三メーター横一メーター五〇センチの矩形」の荷台の上に、二つの折り畳み寝台と一つのハンモックを置いた狭い空間での、他のふたりの兵士の寝ている隙を偸んでの仕事」だった。

彼が戦争中に手がけた彼自身の作品（翻訳などにも手を出している）を挙げると、まず第一に、戦争勃発直前に想を得て制作を進めていた未刊の劇作品『二日間の休暇 Deux jours de vacances』の継続ということであり、これは戦前、戦中、戦後を通じて彼の頭を酷使しつづけた。

第二は、一九一六年二月一二日に他界したマルセル・エベールに捧げるための回想的追悼文、『証言――追悼の辞 Témoignage : In Memoriam』（出版は一九二一年 Grou-Radenez 社より）である。

第三は、コポーとの懸案になっていた新しい道化芝居シリーズ『演台喜劇 Comédie des Tréteaux』であり、そして復員前のものという理由で挙げるとするならば、第四に、一九一九年終戦後の占領地で手がけられたため当然この『一般書簡集Ⅱ』のなかではその消息に接することのできない、短篇『ノワズモン＝レ＝ヴィエルジュ Noizemont-les-Vierges』（一九二八）を含む『子供時代の想い出 Souvenirs d' Enfance』がある。

そして最後に、最も重要なものとして、未来の『チボー家の人びと』となるもののプレオリジナル的小説計画の胎動『善と悪 Le Bien et le Mal』の問題が残される。

以上が開戦から終戦にいたる六年間に関係のある作品もしくは作品計画であるが、このほかに、開戦一年前に出版したばかりの『ジャン・バロワ』の反響が、自然に戦場にある作者のもとへと伝わってきて、その結果作者から引き出すことになった、それへの反応ということがある（この点では『ルルー爺さんの遺言』の問題も残されるが）。

この『ジャン・バロワ』後日譚はかなり重要な意味を持つので、それについてすでにかなりの重要な言及を引用済みなのではあるが、いま少しくそれを補うことで、この項を始めることにする。

『ジャン・バロワ』後日譚

出刊後間もなく『ジャン・バロワ』の著者は、彼が尊敬していた人びと、ロマン・ロラン、フェリックス・ル・ダンテック、アルベール・ウータンなどの著名人からの讃辞や感想を受けとっている。かつて『生成』があまりに落伍者的人間に興味を寄せ過ぎるとして飽き足らぬものを感じていたロランも、『ジャン・バロワ』を受けとるにいたって、作者への共感を深くし、それを伝える文（ふみ）を送ってきた。ル・ダンテックについては、別稿『マルタン・デュ・ガール・一般書簡集Ⅰより』（同志社外国文学研究第三十号）で取り扱ったので省略するが、ル・ダンテックは『ジャン・バロワ』の作者がよもや三〇歳そこそこの青年であろうとは、考えも及ばなかったようである。（ロマン・ロランとフェリックス・ル・ダンテックはともに、マルタン・デュ・ガールとついに顔を合わすことはなく、文通のみによる交際に終わった）。カトリック近代主義の重鎮アルベール・ウータンは、作者への激励の言葉を書き送ったもののよ

うであるが、エベールによると、『ジャン・バロワ』は「ひどく党派的で狭隘にすぎる」と考えていたらしい様子が解る。しかしマルタン・デュ・ガールは、ウータンが自分の書に寄せてくれた興味そのものに感謝の意を表している（一九一四・一・二〇）。そして注目すべき作者の言葉として、「私は私のバロワが、彼の自己解放の時期においてさえ、カトリシスムに満ちているよう、おおいに気をつかいました。それがバロワによって代表される世代の、一つの重要な一面だと思えるのです」という言葉が、ウータン宛の別の書簡に発見される（一九一四・二・九）。やがてエベールの死に際して、この両者は初めて顔を合わすことになり、文通を続けることになったいきさつについては、すでに述べた通りである。

『ジャン・バロワ』後日譚として価値ある照査は、アンリエット・シャラソン嬢に宛てた数通の手紙のなかで可能である。それはこの女流文学者が『ジャン・バロワ』を読んで、小説主人公と作者とを殆んど同一視する意見を作者に書き送ったことによる。作者のそれに対する反論のなかに、問題を残す告白が幾つか見出せるのである。

アンリエット・シャラソンとの文通は、戦死したギュスターヴ・ヴァルモンのことに絡んで、マルタン・デュ・ガールのほうからその口火を切ったのであった。生前親しかったヴァルモンの死についてシャラソンが「Bulletin des Ecrivains」に掲載した追悼文を読んで、マルタン・デュ・ガールはその感動を表明し、ヴァルモンの小説やノートや書簡の出版をシャラソンに任せるという意向を伝えたいと思ったのである（一九一六・一・二五）。

こうしてまだ相見ぬふたりのあいだに文通が開かれたのであるが、やがてシャラソンは『ジャン・バロワ』についての感想を戦地に書き送ってくるようになった。それに対してマルタン・デュ・ガールは、「貴女が語っておられるのは、殆んど私のことばかりです……違います、私はジャン・バロワではさらさらないのです……」と言って、真の

小説というものは「人物を創造する」のであるから、作中人物を作者のなかに求める読みかたは誤っていると、厳重に忠告している。そしてその証拠として、「私にはまだ両親があり、まだ身内の者を失ったこともないし、臨終の人の枕許で本当に涙したこともないし、すでに一〇年前から結婚生活を続けている……」と、小説主人公と自分との相違を列挙しているが、その列挙のうちで、些か注意を引くものが三点ほど見受けられる。それは次のような告白である。

私の妻は心底からのカトリック信者ですが、この内的生活の相違は私たちのうちに、バロワの結婚生活におけるような、破局にいたる不和を惹き起こしたことは一度もありません。（一九一六・七・三〇）

これはマルタン・デュ・ガール夫妻にとって、将来かけても、外面的には全くの現実をそのままを述べたことになる。しかし内面的には問題が残るのであって、『ジャン・バロワ』という作品と作者の家庭生活には、内面的にもっと複雑な関係が存在したと想定し得る余地が残される。

私は子供時代の信仰に復帰することはないでしょう。いまだかつてそこに居たことがないのですから。（同前）

今のところ、殆んどすべての研究家がマルタン・デュ・ガール自身のこの言葉に嘘はないと主張する筈である。意識上の問題としては、小説家自身がつねにこのように繰り返し強調しているのであり、そのように行動したのであるから、間違いはないことになる。ただ小説家の無意識の世界に分け入る場合には、事はそれほど簡単に定義して済まされ得るものかどうか、些かの疑問が残される。

（『生成』の）作中人物たちは殆んどすべては、多かれ少かれ、誰かの肖像でした。（一九一六・七・三〇）

この説明は、前稿『一般書簡集Ⅰより』に引用した作者自身の言葉と矛盾する。

以上、シャラソン宛の手紙を見ると、彼女の作中人物と作者自身との混同に、小説家がほとほと閉口しているのがよく解るのであるが、これはシャラソンに限らず、およそこの小説を読んだ人の誰もが、多少とも同様の詮索を余儀なくされたのである。作者自身の身辺に通じていた人びとには、とくにこの混同が著しかった（モーリス・マルタン・デュ・ガール宛、一九一八・八・九。フェルディナン・ヴェルディエ宛、一九一八・九・一三）。そして、シャラソンにむかって作者が為していたような否定は、かならずしも相手を完全に承服させることは出来なかったのである。そこで小説家は、次のようにも認めることになる。

こうして、私も実際にバロワという人物を、私とは異るものとして、そして私の外に、創造した訳です。しかし、「創造する」というのは大袈裟すぎる言葉であって、およそ作家というものは、きわめて相対的にしか創造することはできないのだ、ということを念頭に置かねばならず、またこのことを忘れてはいけないと思います。作家はつねに何かを写しとるのです。ですから、彼が書くもの、彼が舞台にのせる人物たちのなかには、つねに多かれ少かれ、彼自身が発見されます。私が望むと否とに拘らず、バロワのなかにはどうしても、私に固有の性格や感情の特徴が入っているのです。ですが今日、もし読者が私に、私が自分自身から借りた個所を私の本の余白に青鉛筆で印をつけろなどと決めつけたりしたら、私は本当に困ってしまう訳です。（アンリエット・シャラソン宛、一九一六・一二・二〇）

以上は解りきった当然の理屈であるかも知れないが、二〇世紀において最も客観的な作法を志したマルタン・デュ

・ガールの作品が、つねに優れて作家自身の表出でもあったという事実を裏書きする、作家自身の言葉としてここに引用する価値はあると思われる。

『二日間の休暇』

『二日間の休暇 Deux jours de vacances』（戦中の仮題は『死に逝く者たちのそばで Près des mourants』）の制作課程については、拙論『ロジェ・マルタン・デュ・ガール遺稿「二日間の休暇」について』（同志社外国文学研究・第二十七号所載）のなかで詳述したので、ここではそのことを指摘するに止どめて、重複を避けるようにしたい。

マルタン・デュ・ガールは大戦中この劇作品に、主としてその思索を集中していた。彼は一九一五年に、オージに残してきたこの作品の草稿やプランの類を、戦地に送付するよう妻に命じたのであった（モーリス・レイ宛、一九一五・六・二八）。「書類を開くやいなや、もはや何も存在しなくなった。この時ほど、戦争が自分から遠ざかり、縁遠いものと思えたことはない」とレイに書いている（一九一五・七・九）。そして「僕はこの劇作品をポケットに入れて戦地から帰るだろう」とアンドレ・フェルネに書き送っていた彼なのである（一九一五・八・二八）。しかし彼がそれを完成するのは、終戦後においてでしかない。戦争末期においては、その制作という行為そのものに懐疑を抱くようになり、暫くそれの中断の止むなきにさえいたっている。この懐疑がどのような外的現実によって、またどのような戦後未来への予測によって強制されたかという状況については、本稿でもすでに充分説明がなされていると考える。ただ『一般書簡集Ⅱ』の照査によって、それがたんなる戦後社会におけるモラルの混乱という予測のみにとどまらず、

祖国にもたらされる社会主義的変革という予感にも強く作用されていたことが明瞭になったのは、意義ふかいことであった。

第二のマルセル・エベール追悼のための『証言』については、エベールの死について記した際、すでに解説済みである。

『演台喜劇』

第三の『演台喜劇』について、たとえばその第一作『マランドラン主人たちを揺さぶる Malandrin secoue ses maîtres』についての消息などは、この『書簡集』のなかに一切触れられていない。おそらくそれは、『一般書簡集Ⅲ』に期待しなければならないのであろう。ただ『ルルー爺さんの遺言 Le Testament du Père Leleu』(初演一九一四)と『演台喜劇』とを関連させて、演劇にもたらす新機軸としての舞台の様式化的単純化についての思索が巡らされている。そしてこれは、『二日間の休暇』にも影響を及ぼす。

> 僕は頭の片隅に、僕の劇作品(『ルルー爺さん』のこと)のある手直しの計画、今までとは異る舞台的脚色の計画を持っている(とは、一切の背景(デコール)の放棄ということだが、このことが細部の幾つかの変更をもたらすだろう)。この計画は、演劇についての一連の省察、そして新しい演劇形式についてのさまざまな明確な観念に結びついている。その幾つかの見本となる作品がすでに僕の頭のなかにあり、それらに対して、『ルルー爺さん』の手直しが良い準備練習になるだろうと思う。だが、先の話はやめよう。
> (ガストン・ガリマール宛、一九一七・七・二九)

右は、ガリマールから『ルルー爺さんの遺言』の出版（一九二〇）のための原稿見直し要求があったとき、戦地でそのような作業ができる訳がないという理由とともに、もう一つの断りの理由として述べたものである。

舞台装置の単純化は、戦前のコポーとの対話のなかから、とはつまり、ヴィユー・コロンビエ座の新しい目論見のなかから生まれたものであり、演台喜劇そのものという小さな問題ではなかったが、マルタン・デュ・ガールの頭のなかでは、それと深い係わりを持って考えられていたのであった。

それから三か月後、アメリカにいたガリマールに代わってN・R・F・社の留守業務を担当していたベルト・ルマリエに、ガリマールに述べたのと同じ理由を挙げて『ルルー爺さん』の見直しの断りを告げているが、それを見ると『ルルー爺さん』をも演台喜劇的様式で上演させたいという考えのあったことが窺える。すなわち、この田園笑劇を見直しするからには、その田舎言葉をさらに思い切り簡素化して、わざとらしさと無駄を省きたいという考えを述べたあと、次のように書くのである。

それに、私は演出と演技の変革を考えているのです。それはあの劇をはるかに上演しやすくするでしょう。どこででも、そして、古い安楽椅子一つと台所椅子一つと木箱一つだけの、舞台装置抜きということです。それはヴィユー・コロンビエ座の精神に合致すると同時に、一つのにわか芝居（トレトー）として書いた私の劇の精神にも合致します……私は（たとえば）ブーケとロリーが一瞥のもとに、舞台装置なしの一つの演台の上で上演できるのが望ましいのです。（ベルト・ルマリエ宛、一九一七・十一・四）

右の宣明は、『ルルー爺さん』と『演台喜劇』、それに彼が制作を進めていた『死に逝く者たちのそばで』（『二日間の休暇』）という、三種の作品に関係ある発言と見なされ得る。果たせるかな、ピエール・マルガリチスが『二日間の休暇』のために画いたデコールは、背景なしという演台でこそないが、写実主義的演劇のためのものとしては意想

外な、黒い扉と灰色の扉に象徴的価値を持たせた、きわめて様式的なものとなっている（拙稿『マルタン・デュ・ガール遺稿「二日間の休暇」について』のデコール図解参照）。

間もなく、マルタン・デュ・ガールは演台喜劇のための作品として、『マランドラン主人たちを揺さぶる』と『オレ・イラ』という二つの作品を書くことになる。しかしその前に、彼が『ルルー爺さん』を演台喜劇に書き変えようとしていた形跡が『一般書簡集Ⅱ』によって窺えたのは、一つの新しい発見であった。彼が『二日間の休暇』や『善と悪』を仕上げまたは書き進むことを差し控え、即応的で社会諷刺的な『演台喜劇』に意欲を燃やしたのは、すでに跡づけた彼のフランス社会の未来への不透明な展望が理由となっていた。この点については本稿でも若干触れたが、『二日間の休暇』を扱った拙稿でより詳しく分析している。（一九八一年一一月パリ国立図書館で開催された「マルタン・デュ・ガール国際学会」での研究発表に赴いた私は、そこで医師フロマン博士と邂逅し、『マランドラン』と『オレ・イラ』の原稿をフロマン博士が所有していることを知った）。

『ノワズモン＝レ＝ヴィエルジュ』およびそれを含む『子供時代の想い出』は、終戦後一九一九年ラインラントの占領軍に参加したときの余暇に書いたもので、この『書簡集』には含まれていない。また寸劇『不協和音 Dissonance』についても、なんの言及も見られない。

将来『チボー家の人びと』となるものの小説計画は、一九一五年三月頃から想を巡らせていたのであるが、これについては、すでに本稿の種々の場面で関係づけて考えてきた。たとえばアンドレ・フェルネについての個所や、ジャ

ン・フェルネへの文学相談など……と言うより、大戦中の体験のすべてが、多かれ少かれ小説家の血となり肉となって『チボー家』への蓄えとして沈澱蓄積されて行ったのだと考えなければならない。しかし、彼が漠と予感していたこの小説計画は、戦時中ついに手を染められることなく終わったのであり、『一般書簡集Ⅱ』のなかでは、ニーチェの『善悪の彼岸』(一八八六)(この標題の仏訳は Par delà le Bien et le Mal となる)について語っているのが、僅かに彼の予想していた標題「Le Bien et le Mal」との関係への暗示を感じさせる以外、示唆的な言及は殆んど発見し難いのである。

対象資料

Roger Martin du Gard, *Correspondance générale II (1896~1913), édition présentée et établie par Maurice Rieumeau avec la collaboration d'André Daspre et de Claude Sicard*, Gallimard 1980.

基礎資料

未刊の自稿『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』、その他。

〔追記〕「同志社外国文学研究・第三十号」の拙論『一般書簡集Ⅰより』に次の訂正を加える。1、二一頁四行目の(一九〇三・一〇・七)を(一九〇三・一〇・一七)に。2、二四頁一一行目に(ピエール・ラン宛、一九〇七・六・一三)を加える。3、二五頁五行目の「一七か月」を「一六か月」に。4、三一頁二行目の「七月二六日」を「一一月一八日」に、「ジャン・フェルネ宛」を「フェルディナン・ヴェルディエ宛」に。5、四〇頁一三行目の「アンドレ」を「ジャン」に。6、三頁九行~一〇行の事実が再度変更になり、復旧したと、一九八一年一一月のパリ・R・M・G・国際学会の際、リュノー氏自身の口から聞くことができた。